

7 でか小屋再生おせっ会

活動のテーマ：明治期の芝居小屋「でか小屋」の再生に向けた調査研究

活動の特徴

芝居と縁の深い地域の特性を生かし、
官民一体のまちづくりの機運をリード



活動対象地域 石川県七尾市



キーワード

木造芝居小屋の再生
港町・七尾の物語の再生

団体のミッション

旧芝居小屋の調査研究を行い、小屋の存在や歴史的価値を市民にアピールすることで保存機運を高め、さらに地域活性化のシンボルとして小屋を再生・活用する。

助成対象活動の背景

専門家と協働の学術的な調査によって住民の小屋保存意識を醸成し、行政に小屋を活用した具体的なアクションを引き出すきっかけにする。

この団体とは・・・

地域活性化・震災復興のシンボルとして旧木造芝居小屋の再生・活用を目指す住民、まちづくり専門家の集まり

活動内容

- ・旧芝居小屋の学術的調査の実施
- ・震災被害調査、建物応急補強工事の実施
- ・芝居小屋再生チャリティーコンサート

団体設立時期 2004年8月
代表者 高澤 良英
連絡担当者 谷内 博史
連絡先 住所 〒926-0048 石川県七尾市松物町57-10 情報処しるべ蔵内
でか小屋再生おせっ会 事務局
電話 0767-52-1231
FAX 同上
E-Mail dekadangoya@gmail.com
ホームページ <http://dekadangoya.exblog.jp/>

1. 団体の設立経緯と目的

1) 地域や社会の状況・課題・ニーズ

石川県七尾市は、能登半島のほぼ中央に位置し、天然の良港である七尾港を中心に北前船の交易等、古くから能登半島の中心都市として栄えてきた。平成16年10月1日に田鶴浜町、中島町、能登島町の3町と合併し、新七尾市が誕生した。平成16年のデータでは、年間製造出荷額745億円、年間商品販売額1,534億円である。また、開湯1,200年の和倉温泉は、年間約100万人の入込み客数を誇る能登最大の温泉地である。

近年、少子高齢化や過疎化の波が能登半島全体を覆い地域の活力が減衰しつつあり、七尾市の人口も減少の一途をたどっている。特に七尾市の中心市街地では、空き家・空き店舗の増加による地域の空洞化、ひとり暮らし高齢者の増加、商店街の経済力の衰退などが顕著であり、この地域をコミュニティ・商業の面からどう再生・活性化していくのかということが課題となっている。また中心市街地は歴史的に形成された市街地であり、多くの歴史的建造物も残っており、建物そのものや街並み景観の面から、維持・保存・活用していくことが課題となっている。

こうした状況に対して、中心市街地にある一本杉通り商店街の商店主らを中心に、平成15年から通りの賑わいづくりを目指して通りにある町家商家などの歴史的建造物の国指定登録有形文化財への申請の熱が高まり、翌年には一本杉通りから4軒（現在は5軒）の登録がなされることとなった。また、これと時期を同じくして、地域独自の文化である「花嫁のれん」を各商家の店舗内に展示する「花嫁のれん展」を企画、実施したところ好評を博すところとなり、第4回目を迎えた平成19年には、震災直後にも関わらず、期間中

(4/29～5/13)に8万人もの来訪者があるイベントに成長した。

また、花嫁のれん展の開催期間でない時期もふくめた通年にわたって、和倉温泉の宿泊客を中心に、全国各地から観光客が少しずつ一本杉通りや中心市街地に訪れ、マップを片手に町のそぞろ歩きを楽しむようになってきた。

このような動きを背景として、地域の歴史的建造物の保存・活用の機運が高まり、平成16年暮れには七尾歴史街道まちづくり協議会が発足し、地域にある歴史的建造物の保存・活用についてのニーズが高まっている。

2) 活動のきっかけ・目的

平成16年の七尾歴史街道まちづくり協議会の発足については前項で述べたが、この協議会が地域の歴史的建造物の所有者と七尾歴史街道（旧灘浦街道、能登街道、内浦街道）沿いの各町会を構成員とする、七尾の中心市街地に現存する歴史的建造物の保存・活用を推進する組織であるのに対し、そうした歴史的建造物の中でも特に大きな建物である「でか小屋」の保存活用をする会として本会は結成をされた。

「でか小屋」については、それまで新聞報道などを通じて、明治時代ごろに建造された木造芝居小屋として、地元出身の福井工業大学市川秀和准教授の歴史的建造物調査の成果として紹介をされていたが、特に保存活用についての動きはなかった。しかし、前段の一本杉通りの動きを受けて、七尾歴史街道まちづくり協議会の設立に先立ち、本「でか小屋再生おせっ会」は平成16年8月、一本杉通りの商店主や建築士、まちづくり会社メンバー、学識専門家、市民ボランティアらによって設立された。旧芝居小屋の歴史的経緯や保



でか小屋周辺の街並み



でか小屋の外観

存・活用方法について調査研究を行い、でか小屋の存在や歴史的価値を市民にアピールし、保存機運を高めていくとともに、官・民連携のもと能登・七尾の活性化のシンボル施設として再生していくことを目的としている。

2. これまでの実績

本会の活動実績は下記の通りである。

平成 16 年

- 8 月 でか小屋再生おせっ会設立
全国芝居小屋会議 内子大会へ参加
- 10 月 小屋内部の清掃活動を開始
- 11 月 でか小屋寄席の開催
でか小屋再生の PR イベントとして仮設舞台・客席をつくり実施

平成 17 年

- 5 月 猿舞座による猿回し公演の開催
全国芝居小屋会議技術支援部門による第一次でか小屋調査
日本大学生産工学部中村好文ゼミによるでか小屋第 1 次実測調査の実施
- 6 月 仮設舞台の設置・取り付け作業開始
- 8 月 でか小屋再生に向けた七尾市長との懇談会の開催
- 9 月 でか小屋再生 1 円玉募金の開始
日本大学生産工学部中村好文ゼミでか小屋再生プラン発表会の開催
全国芝居小屋会議 下呂大会へ参加
- 10 月 でか小屋芝居茶屋「素人歌舞伎公演」
李政美でか小屋再生応援コンサート



歌舞伎体験教室

平成 18 年

- 3 月 研修視察 兵庫県豊岡市出石町 永楽館再生
とまちなか観光の取組み視察
でか小屋再生シンポジウムの開催
- 5 月 谷本石川県知事でか小屋視察
第 2 回 七尾市長との懇談会開催
- 7 月 研修視察 熊本県山鹿市八千代座再生とまちづくり中村勘三郎襲名公演
- 8 月 七尾市関係各課との懇談会開催
- 11 月 NHK ラジオ全国生放送「80 ちゃんねる」に出演
- 12 月 でか小屋再生チャリティ寄席 立川流落語開催

平成 19 年

- 1 月 前進座による歌舞伎体験教室 in 能登演劇堂開催
- 3 月 25 日 能登半島地震発生、でか小屋全体が傾く
27 日 緊急補強を施す

3. 助成年度の活動内容

1) 全体像

能登・七尾 北前船文化と芝居文化の融合による中心市街地の活性化

港町七尾の北前船主らが建造した庶民の娯楽の場・芝居小屋「でか小屋」を中心市街地再生のシンボルとして再生保存し、現代に息づく木造芝居小屋として公設民営による芸術文化の振興、まちなか回遊観光の拠点として活用するため、以下の活動を行う。

芝居小屋の再生に向けた専門家と市民ボランティアの協働による学術的調査の実施

これまで芝居小屋の保存再生に向けて会で実施してきたボランティア調査の結果について、芝居小屋建築の視点、七尾の芝居文化の視点から学術的な裏付けを



でか小屋芝居茶屋開催時の会場

得るために、専門家との協働により調査研究を実施した。

具体的には、現在失われている建物前面下屋部分の推定復原図を得るための実測調査、保存再生に向けた建物の躯体部分の実測調査、奈落・回り舞台・花道など、芝居小屋であることを決定づける建物地面部分の遺構調査、また、文献調査として、金沢・富山など大都市部の芝居小屋で上演された芝居上演記録から当時の七尾における芝居公演記録の掘り起こしを行った。

調査体制は、建物調査については、全国芝居小屋連絡協議会の技術支援部門スタッフ協力のもと、市民ボランティア、七尾建築士会メンバーとともに、調査プロセスを公開見学できるワークショップとして実施をした。調査に要する足場資材等や人員については企業の協力も要請することができた。

文献調査については、当初、大学の研究室との連携を模索したが、最終的には、地元の神主（神社に相当の古文書があるため）、郷土史家、教育委員会文化財課職員、芝居文化研究の専門家からなる研究チームを編成し、研究会を通じての資料の収集を行った。

2) 活動の詳細について

時系列に沿って助成年度の活動内容を報告する。

- 4月8日 震災被害緊急調査の実施
- 14日～15日 建物応急補強工事（第一次）の実施
- 5月23日 でか小屋再生チャリティコンサート「和むすび」の実施
- 6月25日 第1回公開調査WS 学習会の開催
文化財的建築物の調査方法について
応急補強工事費用の寄付の呼びかけ
- 7月 中越沖地震の発生、寄付の継続呼びかけ
- 8月 寄付の継続呼びかけ
- 9月 寄付の継続呼びかけ



石川県知事によるでか小屋視察

- 10月12日 文献調査の研究会の立ち上げ
- 11月23日～25日 全国芝居小屋会議 川越大会にて調査活動の中間報告実施
- 12月8日～9日 第2回公開調査WS 建物応急補強工事（第二次）の実施
- 1月20日 応急補強工事（第二次）報告会の開催、寄付の継続呼びかけ
- 2月3日 第2回 文献調査研究会 第2回寄付の継続呼びかけ
- 3月13日 第3回 文献調査研究会
- 16日～17日 第3回公開調査WS 建物前面調査、建物内部遺構調査の実施
- 29日～30日 第4回公開調査WS 建物前面壁の張替え補強工事

先にも述べたように、助成年度の本会の活動は、能登半島地震により大きく遅延、変更を迫られることとなった。築100年を越える木造芝居小屋が地震により大きく傾いたため、小屋の所有者や小屋周辺の市民、行政当局などから「解体しよう」という声が出てきてしまえば、小屋の再生は無に帰してしまうし、調査継続が難しくなってしまうことが危惧された。

そこで、本来の目的である調査実施のための安全性確保のために建物補強工事を優先しての活動の開始となったことは否めない。以下、調査に先立つ補強工事について述べていくこととする。

(1) でか小屋震災被害緊急調査及び建物応急補強工事（第一次）

建物応急補強工事の方針立案のための専門家による緊急調査の実施

日時：平成19年4月8日



学習会「文化財的建築物の調査方法について」

参加専門家 全国芝居小屋会議技術支援部門 賀古唯義氏

地震直後の4月8日(日)に開催した緊急調査会では、会のメンバーでもある七尾鹿島建築士会の応急危険度判定士有資格者の建築士や、全国芝居小屋会議の技術支援部門の賀古唯義氏ら専門家との協議の結果、まずは建物の応急的な耐震補強を施し、調査に耐えられるような安全性を確保し、歴史的木造建築物にとっての最大の敵である雨漏りを防止するための、小屋上部の屋根瓦葺き替え工事の必要性が確認された。この緊急調査によって確認された補強方針は下記のものであった。

建物の補強方針について

- ・地震により建物前面の客席部分が前傾しているので建物を支える支柱部分を、現在、大梁を支えているような仮設資材を用いた補強により計8ヶ所ほど支えた方がよい。
- ・補強ののち、舞台下手側の柱が台座よりおちかかっているため、この柱をきちんと載せなおすことも必要。はずれている梁もほぞに入れなおす。添えなどはしないほうがよい。
- ・柱の補強をした後に、現在屋根にのっている瓦をおろし、屋根部分にかかっている約15tの重さを取り除く。
- ・瓦については古材として選別してきちんと保管する。選別方法については指導できる。
- ・瓦の下はおそらく木端、杉板葺きになっていると思われる。野地板を屋根にはり、その上に波板トタンを屋根との間に空気の間をつくるようにはっていく。



でか小屋再生チャリティコンサート

建物応急補強工事の実施

日時：平成19年4月14日、15日

先に定めた補強方針に従って、仮設資材を用いて補強を行った。

仮設資材については、地元の企業「大同仮設工業」が、無償で長期リースをしてくださることになったが、足場組みの作業については業者に頼むと莫大な費用がかかるため、おせっ会メンバーでもある建築士会メンバーの指導のもとお手伝いとして参加した市民ボランティア6名により組むこととなった。

(2) でか小屋再生チャリティコンサート「和むすび」の実施と寄付金(募金)集めの継続

先におこなった応急補強工事以降、積雪のある冬までに建物屋根部分の瓦の重さを取り除く葺き替え工事を行う必要があり、この費用がかさむことが予想されるため、市民からの寄付を募るチャリティコンサートを実施することとなった。

小さな和がむすばれ大きくなる 手と手がむすばれ大きくなる

「和むすびコンサート」

日時：平成19年5月23日 夜7時から

ところ：七尾商工会議所2階ホール

演奏：「香音天」 甲斐いつろう (アジア・アフリカ打楽器)

甲斐カオン (横笛・磐笛・うた)

舞踊：花柳鶴寿賀

このチャリティコンサートでは総勢80名近くの市民が集まり、演奏や舞踊に皆が酔いしれた。あわせて



でか小屋の幟旗

おこなわれたチャリティ呼びかけによる寄付金収入は7万3703円であった。

このチャリティコンサート以降、建物の応急補強工事や屋根葺き替え工事の実施資金として、寄付の目標総額を30万円として、これまでも実施していた「1円玉募金」の募金箱設置による寄付金集めを継続して強化していくこととなった。募金箱設置箇所は地元商店街の各店舗を中心に町会公民館、温泉施設、地元信金、郵便局の窓口など以下の場所に協力をいただいた。

「でか小屋再生 1円玉募金箱」設置場所（60箇所）

情報処しるべ蔵、七尾商工会議所、高澤ろうそく店、昆布海産物しら井、ぬのや仏壇店、中谷内陶器店、御菓子処花月、鳥居醤油店、徳永仏壇店、木下精肉店、漆陶舗あらき、三輪書店、六波羅呉服店、お食事処宅蔵、モードセガワ、伊勢福ふとん店、松本呉服店、きもの処凜屋、リフォーム前田、北島屋茶店、大田ムセン、DIPS、紳士服ミズカミ、キノシタ靴店、中山薬局、戸田時計店、加地工務店、麺の華、リアルヘアカッティングYOU、いしり亭、ジュエル石田、春直呉服店、梅屋常五郎、山成紙文具店、フラワーかねこ、御菓子司十三屋、おもちゃのとらや、森善、春成酒造店、石政旅館、牛勝、袖ヶ江公民館、御祓公民館、Café MORITAT、Cafe+Curry Marble、焼肉赤門、きくざわ書店、うらべ家具、昇陽デンキ、田村塗料商会、松本町郵便局、ひよっこり温泉島の湯、瀬川薬局、のと共栄信用金庫各支店

震災前までの「1円玉募金」で集まっていた金額28万4375円に合わせて、最終的に平成19年度3月末時点では38万480円まで募金が集まった。



文献調査研究会

この寄付金に、今回の助成金からの建物補強費用に45万円、ならびに会の本会計から、これまでの活動により蓄積してきた会員会費その他の資金36万7047円を合わせて、総額120万円近い資金を補強工事に支弁できることとなった。この補強工事の詳細については後述をする。

(3) 第1回公開調査WS 学習会の開催 文化財的建築物の調査方法について

日時：平成19年6月25日

文化財的建築物の調査方法や修復方法について、メンバーであり建築士でもある石橋良和氏を講師とした学習会を行った。

(4) 文献調査研究会の開催

文献調査については、当初6月段階での研究会の設立を予定していたが、関係メンバーの震災後の多忙により予定が遅延し、10月の設立となった。

研究会のメンバーは以下の通りであった。

研究会委員名簿（案）

委員長 大森 重宜（七尾 大地主神社宮司、金沢星陵女子短期大学教授）

委員 穴倉 玉日（泉鏡花記念館 学芸員）

委員 和田 学（七尾市教育委員会文化財課 市史編纂室）

委員 高澤 良英（でか小屋再生おせっ会 代表世話人）

委員 鳥居 貞利（でか小屋再生おせっ会 事務局長）

委員 嶽 徹（でか小屋再生おせっ会 歌舞伎研究家）

委員 畠山 浄（でか小屋再生おせっ会 七尾の歴史研究家）



建物応急補強工事 1

第1回研究会

日時 平成19年10月12日 午後7時から

場所 情報処しるべ蔵

内容 文献調査の進め方と役割分担について

第2回研究会

日時 平成20年2月3日 午後7時から

場所 情報処しるべ蔵

内容 七尾と周辺都市の芝居興業記録について

第3回研究会

日時 平成20年3月13日 午後7時から

場所 情報処しるべ蔵

内容 建物調査結果と合わせた建物建造年の考察について

それぞれの分野での自主研究の成果を持ち寄って8月初旬に第1回の研究会を開催する予定だったが、7月16日には新潟県中越沖地震が発生、七尾でも震度5を記録する大きな揺れとなり、地震があった地域には近く二度と地震が起こらないという安全神話をくつがえされることとなった。この結果、でか小屋については、従前の補強工事により安全性が確保され大きな被害はなかったが、会のメンバーの間では、折からの地震による被害に加えて住居等でも被害が出、より一層、活動が停滞した。

上記研究会の開催は10月12日に持ち越され、ようやくの開催となったが、その後、それぞれの調査結果を持ち寄って第3回まで文献調査研究会を開催することができた。

文献調査の成果については、以下にまとめて報告をする。



建物応急補強工事 2

<文献調査概要>

1. でか小屋の概要

①横川巴人作品集「夢」（横川巴人会）昭和44年11月発行

・府中の浜手に2つの芝居小屋があった。番伊の小屋と大小屋（おおごや）で、大小屋は七尾で一番古い歴史を持った芝居小屋で、藩政末期にあったと聞いている。

・明治26年頃に作事町の連中で打った素人芝居がこの小屋の芝居の打ち納めだろうと、道具方をやっていた古老が話した。

・後に春作（七尾の当時の北前船廻船問屋）の筵納屋になり、今は鳥木の鉄工場となって残骸を留めている。（昭和38年8月記）

②大林昇太郎「七尾町旧話」（七尾地方史の会）昭和60年11月発行

・巴人は「おおごや」と書いているが、「でかごや」である。これは七尾の方言で「でかごや」と言われていたに違いない。

・これまで「番委の小屋」とか「でかごや」といって固有名は無かった。

・巴人が言う明治26年の作事町の素人芝居は、母から聞いている点を総合して、およそ的確とみられる。（昭和45年5月20日「七尾の地方史」第三号）

2. でか小屋の変遷

・明治26年、作事町有志による素人芝居「菅原伝授手習鑑」を最後に芝居小屋の幕を閉じる。

・以降、春作商店（春成作左エ衛門）の筵倉庫に転用された。

筵は、七尾の特産品として、北前船により北海道に運ばれ昆布やニシンの包装材に使われた。



瓦を一枚一枚たたいてチェック

- ・太平洋戦争中に、道路拡張のため、でか小屋木戸口部分（奥行3間分）が撤去された（春成家に分筆されたメモが残っているのを確認）。
- ・昭和35年、現所有者鳥木氏が取得し、鉄工所に使用。
- ・現在、鉄工所は廃業し、鳥木氏の倉庫兼ガレージとして使用されている。

3. 七尾の芝居小屋の変遷

小屋名	場所	開館時期	閉館時期	備考
でか小屋	府中町	明治前期	明治26年	
青海座	府中町	明治前期	明治中期	青海楼（現・番伊）の小屋
松尾座	府中町	明治35年	明治38年	大火により小学校仮校舎に転用、明治42年移築
七尾歌舞伎座	三島町	明治42年	大正4年	松尾座を移築、火災で焼失
中島座	三島町	明治後期		北國新聞興業記事あり
七尾座	阿良町	明治後期	大正	北國新聞興業記事あり
大正座	阿良町	大正4年		七尾座を取り壊し移築
能登劇場	作事町	昭和	昭和	
七尾劇場	三島町	昭和	昭和	
湊座	阿良町	昭和	昭和	

4. 七尾における芝居小屋の変遷

- ・七尾での最も古い芝居記録は、1699年、菊池提要が「能登釜」で本宮まつりでの奉納（氏子）歌舞伎の



屋根のこけら葺きについて学習

様子を詠った句が残されている。

- ・その後、1717年（享保2年）、森田盛昌が「能州紀行」のなかで豆腐町（現・生駒町）の本宮まつりでの奉納歌舞伎の様子を記した。
- ・職業歌舞伎一座の興業記録については、1821年（文政4年）、大阪歌舞伎役者坂東三津四郎、中村歌之助が金沢の座本により「所口芝居」として行われた（番付が残っている）。

- ・幕末期、仮設舞台による興業記録が番付として残されている。

竹町（現・三島町）湊芝居（安政6年）

府中町湊芝居（幕末期）（石川県史史料編）

- ・明治期

明治10年 西三階地区で農村歌舞伎を実施（藤原比古神社）

明治16年 府中町若衆による奉納歌舞伎（本延寺奉納額）

明治24年 本宮社の奉納番付

明治32年 本宮社の押し絵額

(5) 第2回公開調査WS 建物応急補強工事（第二次）の実施

日時：平成19年12月8日、9日

参加専門家 全国芝居小屋会議技術支援部門 賀古唯義氏

4月に実施した緊急調査及び応急補強工事（第一次）により立てた方針に沿って、建物補強工事（第二次）を実施した。

「でか小屋」応急補強工事（第二次）の目的と成果

1. 工事の目的と方法

今回の工事は、能登半島沖地震で傾斜の増した「で



洋釘に混じって和釘の跡が見られる

か小屋」を、今冬の積雪から守るために行った補強工事である。この工事により、重い屋根瓦をおろして軽いトタンの仮葺きに変更することにより、屋根荷重を減らして建物の負担を軽くすることができた。また、トタンを葺き重ねることによって屋根面の強度が上がるので、「でか小屋」全体の耐久性向上が期待できる。

2. もう一つの目標 = 痕跡調査

今回の工事のもう一つの目標は、「瓦屋根に改築される前の「でか小屋」は、屋根を何で葺いていたか?」というかねてからの疑問を解く資料を得ることであった。分解作業を行うと、普段は見ることができない部分を間近に見られるうえ、部材を直接手に取って調べることができる。「でか小屋」のような歴史的建造物にとって、工事は歴史の真実を調査する最大のチャンスである。

3. 調査結果

上記の痕跡調査の結果、大きな成果が上がった。「でか小屋」は瓦屋根に改築される前は、こけら葺（トントン葺）であったことが明らかになった。さらに、別の場所で建設したものを、現在地へ移築してきた建物である可能性が高まった。

こけら葺であったという証拠は、瓦の下に残っていたこけらが著しく風化しており、長い期間（風化量から推定して10年以上）風雨にさらされていたと判明したことである。もし、このこけらが瓦下地用に葺いたものであれば、雨に当たったことがないから風化するはずがない。今回発見したこけら葺は「実際に雨を防いでいた屋根」であった。

「でか小屋」のこけら葺の技法は、通常の寺社建築に葺く上等なこけら葺に比べると、材料・工法とも

略式で、俗に「トントン葺き」と呼ばれる工法に近い。

- a. こけら：スギ手割板、桎目割、長9.0寸（27.3cm）、厚8厘（2.4mm）、巾3～4寸（9～12cm）
- b. 葺足：1.8寸（5.4cm）9寸板で5枚重ねという割付か。

- 1. 4寸（4.2cm）軒先と棟際の一部にあり8枚板使用。6枚重ねという割付か？

- c. 止釘：洋釘（鉄丸釘）及び竹釘、

こけら葺と野地板の破損が甚しく、屋根面に穴のあいた箇所、野地板・垂木・母屋桁の止釘の関係を調査することができた。その結果、

- a. 垂木は母屋桁に対して洋釘で止めていた（側面から斜めに打込む）。ただし、垂木の中には、洋釘のとなりに和釘の頭が残っているものや、現在の母屋桁当りとずれた位置に和釘が現存しているものがあった。これは和釘で建設された建物を後世に一旦解体し、洋釘で組立て直したことを示している。

- b. 野地板は、垂木に対して洋釘で打ち止めていたが、現状の釘以外に全く痕跡がない板と、和釘や竹釘が残っている板の2種類が見られた。前者は洋釘時代に補足した野地板であるが、後者は解体前にも野地板として使われていたものを再使用した板である。（痕跡が良好に残っていた1枚は、垂木に止めた和釘穴が、現状の垂木割と同じ間隔で2コ並んでいたが、現状の垂木位置とずれていた。これは以前も「でか小屋」の野地板であったものを、旧位置とずれた場所に再使用した証拠である）。

以上によって、「でか小屋」は、和釘時代に建設された建物であり、洋釘時代になってから、一度解体されていることが判る。そして、この「解体」とは、建物の主要部材が取替えられていないことから、破損を



建物前面調査



トタンで覆われている壁面をはがしながら調査

直すために行った解体修理ではなく、移築するための解体であったと考えられる。

瓦も、瓦葺に改修されてから現在の間、1回葺替えられていた。最初の瓦葺きは、古いタイプの洋釘（明治～大正頃）を用い、2度目の瓦葺きは新しいタイプの洋釘（昭和）を用いていた。

4. 今回調査のむすび

「でか小屋」は、和釘時代（明治中期以前）に他所で建設され、洋釘時代（明治中期以降）になってから現在地へ移築された可能性が高い。

「でか小屋」は、こけら葺屋根として設計、建設された建物である。

- a. 現状の屋根勾配は5/10で、これは石置屋根にしてはきつすぎ、茅葺根にしては緩すぎる。瓦葺きにはちょうど良いが、明治中期以前の当地方には、瓦はあまり普及していなかったと考えられるので、こけら葺を想定した勾配であると考えられる。
- b. 現状小屋組は、建設以後に勾配を変えた形跡がないので、最初からこけら葺に適した勾配で建てたことが判る。

現存するこけら葺は、洋釘で止めていたので、明治中期以降に葺いたものである。しかし、当初材と思われる一部の野地板には多数の竹釘穴があいていたばかりでなく、折れた竹釘が残っていた。現存するこけら葺は「でか小屋」誕生の時に葺いた初代の屋根ではなく、何代目かの屋根であることを示している。

なお、上記の移築問題や、後述する埋立年代などから推定される建設年代の考察をⅢに記す。



花道、奈落の遺構調査 1

・史料調査の成果

1. 従来確認されていた文献資料

これまでに文献調査研究会により収集した史料によると、明治30年代には「でか小屋」は現位置に存在しており、その時点では既に「芝居小屋」ではなかったことが判っていた。また、戦時中の道路拡幅で、正面が縮小されたことは、分筆を記した登記関係文書によって裏付けられている。さらに、古老の記憶を記した著作物から、最後の芝居が明治26年に行われたことが明らかになっていた。しかし、建立年代に結びつく、明治時代前半より古い記録は発見されていなかった。

2. 「でか小屋」所在地は明治20年以前は海！

今回新たに発見された、海岸の埋立に関する資料によって、「でか小屋」現在地は明治21年3月の時点（埋立地の所有を申請した時点）では、建物が建っていないことが明らかになった。該当地の埋立計画は明治19年頃？に始まっているので、明治10年代は海だったのである。

・「でか小屋」はいつ・どこで建ったのか？ - 新たな課題 -

1. 年代判定の諸条件

新史料から判明した事実は、

現在地では、明治20年以前には存在していない。

現地調査から明らかになったのは次のとおり、

現在地で建ったのは洋釘時代である（骨格が洋釘打ち）。

現在地で建ててから、こけら葺の耐用年限1周期を経てから瓦葺になった。

瓦葺になってから現在までに瓦葺の耐用年限2周期



花道、奈落遺構調査 2

を経ている。

「でか小屋」の構造形式から考えられることは、

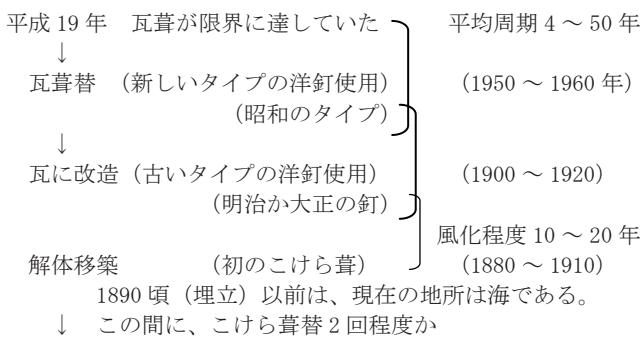
港町の七尾では、洋小屋の技術は早くから導入されたはずで、和小屋の芝居小屋を建てたとすると、明治前半（あるいは初年）以前ではないか。

本格的な芝居小屋の規模をもっているのが、農村舞台やBクラスの小屋とは思われない。

七尾で本格的な商業劇場が建設されたのはいつ頃からなのか？

2. 推測のための年表

現在から、上記の諸条件を考慮して時代を遡ってみる。



和釘で建設 (1840 ~ 1880)
「でか小屋」の建設年代は、古くみならず江戸時代末期、どんなに新しくても埋立以前になる

(6) 第 3 回公開調査 WS 建物前面調査、建物内部遺構調査の実施

日 時：平成 20 年 3 月 16 日 ~ 17 日

参加専門家 全国芝居小屋会議技術支援部門 賀古唯義氏

この作業では、正面のトタンをはがし、現在は失われている「でか小屋」の木戸口に関する情報を得るこ



花道、奈落の遺構調査 3

とが第 1 目標だった。併せて、舞台部分の試掘調査を行い、奈落の有無について見当を付けることが第 2 目標であった。

この調査でわかったことは以下の通りである。

1. 「でか小屋」の本体は今よりも大きかった。

これまでに使っていた復原イラスト (第 1 次) は、現在の大きさの本体に木戸口の庇が付いた規模を想定していたが、今回の調査の結果、本体がさらに 2 間延びていたらしいことが判った。そこから木戸口の庇が前に延びるので、「でか小屋」の旧規模は今より 3 間半か 4 間長かったとみられる。

2. 「でか小屋」本体の構造はとても良くできている。

調査以前から専門家から言及されているように、「でか小屋」の主体部分の構造は「金毘羅大芝居」以外に類例のない和小屋である。それについては、なんの変更もないが、足場の上部に登って、巨大な梁組を目の高さで見た迫力は想像を遙かに超えていた。

しかし、さらに驚いたのは、建設当初から長大な筋違 (すじかい) を併用しており、力学的な面でまことに合理的にできていたことである。これは、逆に言うと建設年代の新しさを想像させるが、それによって「でか小屋」の価値がいささかも損なわれることはないだろう。

3. 「でか小屋」には奈落はなかった！

これは、限られた時間の中で丁寧な発掘調査をした調査成果だが、舞台の框 (かまち) 通りにトレンチカットを入れて試掘したところ、奈落 (廻り舞台の下) の地下室が存在したならば当然あるはずの石垣 (またはレンガ壁) が認められなかった。しかも、現在の地表から数十 cm しか掘らないうちに地下水がわき出てくる



奈落のあったところから染み出した水

ことから、埋立地である当地は、仮に奈落を掘ったとしても、すぐ水浸しになって使い物にならないことが判明しました。まず、奈落は無かったと考えるのが妥当である。

しかし、奈落がなかったからと言って、廻り舞台もなかったとは限らない。地下室が無くても「盆」（廻り舞台の回転部分）を廻せる「ぶんまわし」という機構があったことがこれまでの芝居小屋建築の研究成果からわかっており、もしかしたら、地下水が湧きやすい浜べりの「でか小屋」は、そんな工夫で楽しい演出をしていた可能性がある。

今の時点では単なる空想に過ぎないが、学術的成果の上に立って、絶頂期の「でか小屋」の姿を思い浮かべるのも楽しいこととなってきている。

(7) 第4回公開調査WS 建物前面壁の張替え補強工事

日時：2008年3月29日～30日

第3回の建物前面壁の調査ではがした壁面の張替え補強工事を行った。

この中では、張替えに際して、元のトタン張りにするのではなく、トタンの下から出てきた板張りを再現することを目的に、所有者の理解を得て、板張りでの仕上げをさせていただいた。

また板張りに際しては、新材と古材の色ムラをなくすための新材の杉板を古く見せるための「古色塗り」という文化財建築などの修復現場で活用されている手法を用いて、板張りを実施した。

4. 活動の成果と課題

1) 目的・目標の達成度 自己採点

地震による倒壊・取り壊しの危機を回避できたこと



母屋桁の切断痕跡

が最大の獲得であった。震災からのダメージをバネにかえて市民の間に募金集めでの協力体制ができたことなど、でか小屋再生への意欲を市民の中に燃え上がらせることができたのは大きな成果であったといえる。

調査そのものとしては、応急補強工事と調査活動を両立させる中で、地震がなければ当初予定していなかった屋根の葺き替え工事ともなう調査が可能となり、「こけら葺き」の屋根の確認とそれによる建物建設年代の推定が可能になったことも大きな成果であろう。

文献調査の成果から、現在、でか小屋が建設されている土地が明治21年に埋め立てられたこともわかり、それゆえに、でか小屋がどこか他所から移築されてきた可能性が出てきたことは大きな謎解きの要素を持ち上がらせている。

しかし一方で、期待していた建物内部の遺構調査が規模を縮小して行わざるを得ず、また最大のポイントであった奈落跡が発見できなかったことは謎を深めるとともに、でか小屋の学術的価値の決定的な証拠ができていないことは残念であった。

とはいえ、自己採点としては当初マイナス点であったが、それを盛り返しての80点といったところであろうか。

2) 地域内外への波及効果

地域内では、震災を期に一時期高まりつつあった「でか小屋を取り壊せば？」という不安感を、積極的な活動展開により払拭できたことが波及効果であったろう。

地域外への波及効果は、今後の成果公表を待たなければならないが、中途半端な成果公表をせず、他の芝



舞台の下には地下室はなかったと思われる

居小屋再生事例なども参考にしながら、慎重に成果公表をしていきたいと考えている。

3) 活動の継続性と今後の課題

これまで行ってきた、小屋内部での寄席や歌舞伎など興行開催による市民意識の醸成ということは、地震による補強足場が邪魔になり今後は難しくなってしまった。

今回の調査でも、寄付や助成金だけではどうしても補強工事費が足りず、おせっ会役員が持ち出しをして負担していることから、今後、いかにして活動資金を捻出していくかが課題となっている。

過去の歴史にならい、芝居小屋再建はやはり芝居などの興行を通じたイベント収益でまかなっていくことが、活動資金の捻出と同時に市民の中での小屋再生への機運を高めていく手法であると考えているが、でか小屋以外の場所でいかに「でか小屋再生」を訴えた市民が共有しうる物語性をもった運動をつくっていくか、現在、メンバーの中でさまざまな案を出し合っているところである。

そして最大の課題は、七尾市をはじめ、公的機関からの認知をどう獲得するかであり、ここが今後の活動の継続性に大きくかかっている。

これは、調査開始前から指摘していたことだが、調査結果の公表→公的機関による公的調査の実施→再生計画の政策化、予算化→再生活用 という流れを、官民協働でいかにつくりあげるか、というところについては、いまだ七尾市、石川県などの方針の打ち出しはなく、協力は得られていない。

現在、震災で（こちらも）遅れている、七尾市総合計画や七尾市中心市街地活性化基本計画など、七尾市の活性化施策の中で、でか小屋の再生のまちづくりを



墨汁と朱墨の混合液による古色塗り

政策提案していくことが平成 20 年度の課題になってくるだろう。

5 . 今後の展開

1) 調査結果の報告書化、ウェブページ化と、全国芝居小屋会議を通じた調査結果の公表

全国各地に現存する芝居小屋を活かしたまちづくりに取り組む各地の市民活動団体、自治体関係者がネットワークしている全国芝居小屋連絡会議の第 14 回大会が平成 20 年 10 月 18 日～19 日に兵庫県豊岡市出石町の永楽館で開催される。出石町の永楽館は、これまでまちづくり活動と連動して小屋の再生活動を行ってきたが、いよいよ本年度に復原工事が完了し、片岡愛之助さんら歌舞伎役者による柿落とし公演が 8 月 1 日～5 日に開催されるなど、七尾のでか小屋の再生活動の模範となる活動である。

これまでの調査結果の報告を、この芝居小屋会議の席上で公表し、マスコミなども通じてアピールすることで、今後の再生活用にに向けたはずみをつける。

2) 七尾市総合計画での位置付けへの提言

でか小屋再生おせっ会からの政策提言に対し、七尾市中心市街地の諸民間組織（商店街、町会、商工会議所、TMO、観光協会など）からの賛意を取り付けていくコンセンサス形成が必要となる。

その上で七尾市への提案をせまっていくつもりである。



上段：新材に古色塗り
中段：古材そのもの
下段：無垢の新材

七尾における芝居興行記録の年表

西暦年	年号	七尾の状況	加賀藩（金沢）の状況	備考
1615	元和		・犀川の分流、鞍月用水岸や浅野川河原で芝居興行が行われる。 ・当時の芝居小屋は、木材を縄で組み立て、藁で屋根を葺き、周りを箆で囲んだものであった。	
1637	寛永14年		加賀藩、芝居を禁止する。	
1656	明暦2年		江戸役者、東本願寺で芝居上演。	
1664	寛文4年		加賀藩、再度芝居禁止。	
1673	延宝元年		芝居禁令の中、大阪屋喜衛兵は、役者を招き寺院で興行したため断罪される。	
1699	元禄12年	三町合同奉納歌舞伎（本宮まつり）菊池提要「能登釜」より		
1717	享保2年	豆腐町（現生駒町）による奉納歌舞伎（本宮まつり）森田繁昌「能州紀行」		
1775	安永4年		藩の許可を得て、春日神社境内、宮越町等で、浄瑠璃芝居が行われる。	
1776	安永5年		松任村、山之上村で興行が行われる。	
1777	安永6年		卯辰八幡社で興行が行われる。	
1817	文化14年		町奉行山崎頼母、藩に対し芝居・遊郭の公認を願い出る。	
1818	文政元年		12月6日、藩より芝居が公認される。 12月16日、犀川下流の宝久寺河原で芝居が興行される（小屋掛け）。	
1819	文政2年		町会所の手により、4月常設の芝居小屋、芝居茶屋を建設。5月初演。 建て方がよくないため、建て替えられ9月より再開（南芝居）。	
1821	文政4年	坂東三津四郎一行、川上南芝居で興行	小屋の北側にもう一棟建設される。（北芝居）	
1828	文政11年		経営難により北芝居を廃止。	
1837	天保9年		芝居興行禁止令。	天保の飢饉
1858	安政5年		芝居興行公認。領内各地で芝居興行再開される。	
1859	安政6年	本宮神社拝殿再建竹町芝居（芝居番付より）		
1862	文久2年		藩の風俗規制により芝居興行禁止。	
1867	慶應3年		市中振興策の一環として芝居を公認。	
1868	明治元年		犀川下流の宝久寺河原に芝居小屋建設（西御影町芝居）。	
1869	明治2年		卯辰山奥に芝居小屋建設（間口13間、奥行き22間）（浅野川桜馬場芝居）。	
1871	明治4年	越後座建設（鹿島町二ノ宮）	川上芝居跡地に芝居小屋建設（間口10間、奥行き20間）（川上末吉芝居）。	
1872	明治5年	芝居興行記念額（印鑰神社）		
1873	明治6年	府中湊芝居（芝居番付より）		
1877	明治10年	西三階地区農村歌舞伎（藤原比古神社絵馬）		
1883	明治16年	産土神社屋根葺替芝居興行額（本延寺）		
1888	明治21年	でか小屋現敷地埋立て（佐藤家文書）		
1891	明治24年	西宮神社再建芝居額（芝居番付より）		
1893	明治26年	でか小屋閉鎖		